



端 聡 (アーティスト・CAI03主宰)

SIAF2014では地域ディレクター、SIAF2017では企画メンバーおよび参加アーティストとして関わる。SIAF2024では主宰するCAI03が公募プロジェクト会場として参加。

吉崎元章 (公益財団法人札幌市芸術文化財団 本郷新記念札幌彫刻美術館 館長)

2015年からSIAFコミッティーメンバー。公益財団法人札幌市芸術文化財団の学芸員として札幌のアートに俯瞰する中で、SIAFの考察を続けている。

トーク内容

- ・ SIAF2014に対する地域のリアルな反応・状況
- ・ 北海道・札幌の独自性、地域性
- ・ 札幌の黎明期のアートシーンからSIAF2014までの背景
- ・ 2013年11月のプレイベントを振り返る～ローカルとプロビシナル～
- ・ 地域のアーティストに求められていたSIAF2014のイメージ
- ・ 国際展とは何か?国際芸術祭の必要性、開催までの綿密な戦略
- ・ SIAFの地域への刺激・影響、そしてこれから



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
https://youtu.be/jsBZ__2DrDQ





SIAF2014に求められていたもの、イメージとは？

吉崎：初回の芸術祭に対して個々にイメージしてるものが違っていたと思います。多くの北海道のアーティストは、この地の美術の集大成的な展示を行い、国際的に発信をして道外の人に見てもらおう機会と捉えていたような気がします。でも、芸術祭では、北海道・札幌の歴史を踏まえて、この地に根差す我々がどうすべきなのかということを通して考えていくことが大きなテーマでした。そのため、初回に様々なスキル・ノウハウを持った道外の人たちが集結したことは非常に重要なことでした。加えて、札幌のアートイベントに日本中からアート関係者と美術記者、それからアート愛好者がやってくることなど今までありませんでした。その足掛かりとなったことは非常に大きかったと思っています。

端：やっぱり多くの地元の美術家は、現代美術を中心に紹介する国際美術展だと思っていたでしょう。ですが私は、ユネスコ創造都市ネットワークのメディアアーツ都市となった札幌で開催される芸術祭は、単なる国際美術展ではなく、新たな考え方をアートで試していくことを、本来の目的とするべきだと捉えていました。

その捉え方の背景には、芸術祭の実現には、行政や国との協働が必須だったということがあります。札幌では70年代から90年代くらいまで、多くのアーティストがいろんなグループ展を通して、国際展を目指して運動していました。私も先人の背中を見てきましたが、そうした運動は民間に限られた話で、先人たちはその意識を行政や国に訴えかけるプレゼンテーションを多くはしてきませんでした。ですが、芸術祭の実現のためには、行政の中へ飛び込んで、国際芸術祭の必要性というものを訴えかけない限り、実現できないことが分かってきたんですね。

さまざまな地域で“まちづくり”と“ツーリズム”を一緒に考えるムーブメントが起きていた15年ほど前に、私たちは札幌を観光地としてさらに活性化するために、札幌市にアートツーリズムを提案しました。その構想の中で、国際芸術祭を立ち上げて、新しい産業として展開し、さらにそこにユネスコのネットワークを紐づけていくことを提案していました。モエレ沼公園のグランドオープンという世界的なトピックもこの時期です。

そういった構想が芸術祭実現への足掛かりになり、色々な施策に時間をかけて取り組んできました。
